

高年级

综合日语

综合日语

下册

总主编

彭广陆

〔日〕守屋三千代

本册主编

丁莉

〔日〕守屋三千代 平高史也 冈智之

审订

孙宗光

〔日〕阪田雪子 远藤织枝



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

本教材获得笹川和平财团笹川日中友好基金会赞助

21世纪日语系列教材

高年级综合日语

总主编：彭广陆 [日]守屋三千代
副总主编：何琳 [日]今井寿枝 野畑理佳
审订：孙宗光 [日]阪田雪子 远藤织枝

下册

主编：丁莉 [日]守屋三千代 平高史也
冈智之

副主编：王轶群

编者：丁莉 何琳 刘健 彭广陆
秦刚 孙佳音 王轶群 应杰
[日]今井寿枝 远藤织枝 冈智之
野畑理佳 百留惠美子 百留康晴
平高史也 守屋三千代



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

高年级综合日语. 下册/彭广陆,(日)守屋三千代 总主编;丁莉等 主编. —北京:北京大学出版社, 2015.6

(21世纪日语系列教材)

ISBN 978-7-301-25878-1

I. ①高… II. ①彭… ②守… ③丁… III. ①日语—高等学校—教学参考资料 IV. ①H36

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第112980号

- | | |
|-------|--|
| 书 名 | 高年级综合日语(下册) |
| 著作责任者 | 彭广陆 (日)守屋三千代 总主编
丁莉 (日)守屋三千代 平高史也 冈智之 主编 |
| 责任编辑 | 兰 婷 |
| 标准书号 | ISBN 978-7-301-25878-1 |
| 出版发行 | 北京大学出版社 |
| 地 址 | 北京市海淀区成府路205号 100871 |
| 网 址 | http://www.pup.cn 新浪微博:@北京大学出版社 |
| 电子信箱 | pup_russian@163.com |
| 电 话 | 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62759634 |
| 印 刷 者 | 北京大学印刷厂 |
| 经 销 者 | 新华书店 |
| 定 价 | 787毫米×1092毫米 16开本 12.75印张 210千字
2015年6月第1版 2015年6月第1次印刷
36.00元 |

未经许可,不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有,侵权必究

举报电话:010-62752024 电子信箱:fd@pup.pku.edu.cn

图书如有印装质量问题,请与出版部联系,电话:010-62756370

《高年级综合日语》中方编辑委员会成员

主任:彭广陆(北京大学教授)

顾问:孙宗光(北京大学教授、原广岛女学院教授)

(以汉语拼音为序)

丁 莉(北京大学副教授)

何 琳(首都师范大学副教授)

刘 健(首都师范大学讲师)

秦 刚(北京外国语大学副教授)

孙佳音(北京语言大学副教授)

王轶群(中国人民大学副教授)

应 杰(北京外国语大学副教授)

《高年级综合日语》日方编辑委员会成员

主任:守屋三千代(创价大学教授)

顾问:阪田雪子(杏林大学名誉教授、原东京外国语大学教授)

远藤织枝(原文教大学教授)

(以日语五十音为序)

今井寿枝(国际交流基金会关西国际中心日语教育专员)

冈 智之(学艺大学教授)

野畑理佳(国际交流基金会关西国际中心日语教育专员)

百留惠美子(原高雄第一科技大学助理教授)

百留康晴(岛根大学准教授)

平高史也(庆应义塾大学教授)

前 言

《高年级综合日语》是与《综合日语》(修订版,第1—4册,北京大学出版社)衔接的主干教材,供国内高等院校日语专业高年级(三、四年级)精读课使用,全套教材分为上下两册。

本教材从2011年开始策划,由中日两国专家学者通力合作,共同编写完成。编委会由老中青三代中日两国专家学者组成,大多数成员具有丰富的教学经验和教材编写经验。由于日本文学、日本文化专家的加盟,使探索创新新视角的高级日语教材成为可能。

本教材编写过程中得到了日本笹川和平财团笹川日中友好基金会的大力资助。编委会多次召开全体会议,共同讨论编写方针、编写体例、各课的构成,认真遴选文章,反复推敲样稿。

《高年级综合日语》注重提高学生的语言运用能力,同时注重培养学生的综合人文素养,注重与文学、社会、文化等人文学科知识体系的对接,注重培养学生的思考、表达以及批判、反思的能力。编者对现有教材进行了充分的检视和总结,课文的选篇上,考虑其领域、背景、主题是否具有扩展性和延伸性,原则上回避国内同类教材中的已选篇章,主要选用新近发表、出版的,具有一定影响力、能代表某一领域前沿思想的文章。

教材所选文章题材各异,帮助学生通过本教材的学习,获取观察、解读日本及世界的视点与方法。另外,为了帮助学生真正理解文章内容,梳理内在逻辑关系,理解作者的独特主张,体味文章深层蕴含的文化内涵,了解日本人的思维方式,并通过自己的思考对有关问题有条理地陈述自己的见解,本教材除了词汇、语法等常规性信息外,还设计了阅读前思考、阅读后思考等环节,并为学生的自主学习提供多视角的信息。

《高年级综合日语》(上、下册)分别由10课组成,每课的构成部分及其排列顺序如下:

- (1) 学习目标(「学習目標」),侧重课文内容的理解和语言表达的学习;
- (2) 读前思考(「読む前に」);
- (3) 作者简介(「筆者紹介」),提供有关作者的必要信息;
- (4) 课文(「本文」);
- (5) 注释(设在正文部分两侧),以解释专有名词或熟语等为主;

- (6) 思考题(设在正文部分两侧);
- (7) 日汉同形词(设在正文部分下方),标出读音和声调符号;
- (8) 生词表(「新出単語」),词义用日语解释;
- (9) 要点解说(「ポイント解説」),对课文中出现的关键词语进行讲解。
- (10) 语法解说(「文法解説」),以句式讲解为主;
- (11) 语法练习(「文法練習」),以完型练习为主;
- (12) 阅读练习(「読解練習」);
- (13) 拓展练习(「タスク」);
- (14) 拓展阅读(「さらに知るための手がかり」),可以开阔视野,深入探究。

每册卷末附有生词索引、语法项目索引等。

我们希望《高年级综合日语》能够为学生的日语学习提供有效的帮助。最后衷心地感谢笹川和平财团笹川日中友好基金会的资助。

《高年级综合日语》编辑委员会

2015年4月23日

目次

1. 詩の心	1
第1課 あなたと読む恋の歌百首／俵万智	3
第2課 省略の詩学／外山滋比古	17
2. 芸術の真髄	33
第3課 柳宗理の薬缶／原研哉	35
第4課 建築指南／安藤忠雄	55
3. 名作の薫り	73
第5課 千年のかがやき 紫式部と『源氏物語』／丁莉	75
第6課 もっとも幸福なアニメーション／石田衣良	97
4. 科学の行方	113
第7課 ロボットのデザインに対する二つのアプローチ ／岡田美智男	115
第8課 「恐怖の谷」から「恍惚の峰」へ～その政策的応用 ／遠藤慎一	129
5. 明日への扉	153
第9課 本当の小説とは私たちに向けての 親密な手紙である。／大江健三郎	155
第10課 上を向いて歩こう	175
新出単語索引	179
文法解説索引	194
参考书目	195

1. 詩の心

第1課 あなたと読む恋の歌百首

俵万智

第2課 省略の詩学

外山滋比古

学習目標

1. 現代短歌をより深く味わう方法を身につける。
2. 短歌の意味や詠まれた背景、状況、作者などについて解説する手法を学ぶ。

読む前に

次の短歌を読んで、どんな情景を思い浮かべたか話しましょう。

- いつもより一分早く駅に着く一分君のこと考える(俵万智)
- 男ではなくて大人の返事する君にチョコレート革命起こす(俵万智)

筆者紹介

俵万智(たわら まち)、1962年大阪生まれ。早稲田大学卒業。歌人。1987年、第一歌集『サラダ記念日』が260万部を超えるベストセラーになる。翌年、同作品で第32回現代歌人協会賞受賞。2004年、評論『愛する源氏物語』で第14回紫式部文学賞受賞。2006年、『プーさんの鼻』で第11回若山牧水賞受賞。主な歌集は『かぜのてのひら』、『チョコレート革命』、『オレがマリオ』。歌集のほか、小説『トリアングル』、エッセイ『あなたと読む恋の歌百首』『百人一酒』『短歌のレシピ』など著書多数。本文は『あなたと読む恋の歌百首』(文春文庫、2005年)からの抜粋。(原典は1995.4～1997.3朝日新聞日曜版に連載されたもの。)

あなたと読む恋の歌

俵万智

きみが歌うクロッカスの歌も新しき 家具の一つに数えむとする

寺山修司

短歌:和歌の一形式。五・七・五・七・七の5句31音からなる歌。万葉時代に成立し、平安時代以降、和歌といえは短歌をさすようになった。

普通に考えれば、家具とは並び称せられないはずの「クロッカスの歌」。それを、あえて並べて数えようという気持ちの「も」。

家具を共有することは何を共有することなのか。「ぱりぱりに糊づけしたシャツ」は何をたとえているのか。

「歌」を「家具」にたとえていることを筆者はどのように評価しているか。「季節感」は何の季節感で、「はじまりの予感」は何のはじまりの予感か。

『血と麦』:寺山修司の歌集。1962年出版。「映子」は後に寺山の妻となる女性。
水甕抱けり:水の入った甕を抱いている。
胸いたきまで:胸が痛く感じるほどしっかりと。
きみ:ここでは、男性が女性を呼ぶ言葉。
地平:ここではあなたの生きるべき大地・土地。
つくらむために:作ろうと思う、そのために。
以上を参考にして、2首の歌の意味をとらえてみよう。

二人の新しい生活がはじまろうとしている、そんな弾んだ気分が、あふれんばかりに伝わってくる。生活の風景をふちどる家具たち。それを共有するということは、日常の空気を共有するということ。家具も二人の関係も、やがては心地よく馴染んでゆくのだろうが、今はまだぱりぱりに糊づけしたシャツのように、ちょっとごこちなく、そして新鮮だ。

彼女が口ずさむ「クロッカスの歌」。それもまた、家具たちのように、二人の日常を包むものの一つになるのだ……。目に見える形を持たない「歌」を、物質としての存在感あふれる「家具」にたとえたところが、ユニークだ。それは、目には見えない「愛」というものを、作者が今、まことに確かなものとして感じていることの、象徴でもあるだろう。クロッカスは、春の訪れを告げる花。可愛らしさは彼女のイメージと重なり、その季節感には「はじまりの予感」にぴったりだ。ちなみに紫のクロッカスは、ギリシャ神話のゼウスとその妻ヘーラーの温もりから芽吹いたと言われ、古代では結婚式に飾られたそうだ。作者がそこまで考えに入れていたかどうかは、わからない。けれど、この話を聞いた私は、すぐに掲出歌を思い浮かべた。

歌集『血と麦』の「映子をみつめる」という一連にある一首だ。一連には「わが家の見知らぬ人となるために水甕抱けり胸いたきまで」「林檎の木伐り倒し家建てるべしきみの地平をつくらむために」など、初々しい感覚の歌が多くある。

存在感(そんざいかん)③ 季節感(きせつかん)③ 予感(よかん)④ 神話(しんわ)④ 古代(こだい)① 一首(いっしゅ)① 水甕(みずがめ)④ 地平(ちへい)④

「見知らぬ人」「きみの地平」といった言葉からは、どんなに近づいても、踏み込めないものがある、という気持ちが読みとれる。しかしそれは隔たりではなく、むしろ人格の尊重だろう。相手を自分のものにするのが結婚ではなく、相手とともに生きるのが結婚であり、恋愛なのだ。

演劇、映画、エッセイ、俳句……さまざまなジャンルで活躍した寺山修司だが、私にとっては「歌人」としての彼が、もっとも強烈だ。特に彼の青春を歌った作品は、短歌を作りだしたころから、繰り返して読んでいます。6年前の春、勤めていた高校を辞めて一人で歩きはじめたとき、心のなかには寺山の一首があった。「一粒の向日葵の種まきしのみひまわりに荒野をわれの処女地と呼びき」

「見知らぬ人」「きみの地平」といった言葉からはどのようなことが読み取れるのか。

「まきし」:まいた。「し」は古語で過去の助動詞「き」の連体形。

てらやま・しゅうじ 1935-1983年。青森県生まれ。歌人、劇作・演出家、映画監督。競馬評論も。歌集『田園に死す』など。

一度にわれを咲かせるようにくちづける ベンチに厚き本を落として

梅内美華子

作者は、1970年生まれ。わっと明るい屈託なくちづける歌は、この若い世代ならではのものだろう。

場所は、私は公園だと思った。もっと若い読者なら、駅を思い浮かべるだろうか。つまりベンチのあるところで、キスをしてもおかしくないところである。

「最近の若いモン」は、よく人前でキスをしている。「まわりの人にそんなところを見せて、恥ずかしくないのか」と古い大人たちは顔をしかめるけれど、彼らは、まわりの人に見せているのではなく、まわりの人が見えていない状態なのだから、しかたがない。

一度に咲く、という表現から私は、北海道の春を思い描いた。梅、桃、桜……順々に開くのではない。長い長い冬のあと、いっせいに競うように、花たちは咲きはじめる。そんなふう、からだの隅々まで、そして心の隅々まで、私の中にあるつぼみを、一気に開かせる若者の唇……その、

あなた自身はこの短歌からどのような情景を想像するか。また、短歌の作者が想像する相手の男性像も想像してみよ。

「一度に咲く」という表現から筆者が思い描いたのはどのような情景か。

恋愛(れんあい)① 青春(せいしゅん)① 一粒(ひとつぶ)② 荒野(こうや)① 処女地(しょじょち)② 青森県(あおもりけん)④ 劇作(げきさく)① 歌集(かしゅう)① 田園(でんえん)① 人前(ひとまえ)① 梅(うめ)① 性急(せいきゅう)① 比喩(ひゆ)①

下の句からどのような男の子が浮かんでくるか。それによって、どんな効果があるか。

この2首の歌はどのような意味か、どんな場面が浮かぶか。

相聞歌：和歌の分類の一つ。広く唱和・贈答の歌を含むが、主に恋愛の歌を指す。

どんなところが、「余裕を持っている」と感じさせるのか。

この歌の意味を考えよう。あなたにもこういう経験があるか。

「雪よ林檎の香のごとくふれ」という比喻からどんなイメージがわくか。

ここでの「甘酸っぱい気分」には、どんな感覚が重ねられているか。

少し性急なくちづけを、上の句は確かな瞬間として受けとめている。実感のこもった、ユニークで美しい比喻だ。

若者の性急さは、下の句からも、よく伝わってくる。本を置くのではなく、落とす。「厚き」からは、わりと生真面目きまじめで物静かなタイプの男性が想像される。軽いノリのひょうきんな男の子や、恋に慣れたプレイボーイとは、「厚き」本は結びつきにくい。たった2文字だけれど、相手をさりげなく描写して、効果的だ。

同じ作者に「われよりもしずかに眠るその胸にテニスボールをころがしてみる」「眠りつつふたつの枕欲しがりて君はひとつをひしと抱きぬ」といった作品もある。官能というよりは、草の匂いを感じさせる相聞歌。そして掲出歌を含め、まことに余裕を持って相手を観察しているところも、共通項だ。気持ちが醒さめているというわけではない。たぶん、まったく対等なのだろう。幼いときから同じ教室で学び、遊び、クンづけで呼んできた「男の子」との恋愛の、一つのかたちがここにあるのだと思う。

そしてその「男の子」とは、こんな関係も充分に成り立つのだ。「恋人であらねばやさしき言葉もて男友達を励ましている」

うめない・みかこ 1970年、青森県生まれ。

ゼブラゾーンゼブラゾーン ほたろう
「かりん」所属。歌集『横断歩道』『火太郎』など。

君かへす朝の舗石さくさくと

雪よ林檎の香のごとくふれ

北原白秋

雪の日の朝。彼女は小さな足跡をつけて、遠ざかってゆく。「さくさくと」が、踏まれる雪の感触や音をとらえて見事だ。また、そのささやかな音を一首に響かせることによって、あたりの静けさをさりげなく伝えている。

下の句の「林檎の香のごとく」という比喻の、なんと魅力的なこと。初めて読んだときから、まるで言葉の魔法にかかったように、掲出歌を私は覚えてしまった。そして口ずさむたびに、優しく甘酸っぱい気分が、胸の中に広がる。

官能(かんのう)① 充分(じゅうぶん)③ 足跡(あしあと)③ 感触(かんしょく)①

この歌の背景にある事実を知らなかったとき、私は、愛を交わしあった男女の、幸せな翌朝の歌だと思っていた。そして作者名がもし隠されていたら、女性の作品だと思っただろう。きぬぎぬの朝には、男が見送られるもの、という思い込みがある。しかし、白秋は男性だ。寒い雪の朝を女性が帰ってゆくのは、何故だろう。と、ちょっとひっかかった。

その点については、具体的な背景を知って、なるほどと納得がいった。掲出歌の「君」は、当時人妻だった松下俊子という女性で、白秋はその夫から姦通罪で訴えられてしまった。この歌の発表時には、拘置所の中だったのである。

そういう背景をふまえて読むと、さらに細かいところが見えてくる。「君かへる」ではなく「君かへす」であることの重み。二人は社会的に引き裂かれた状況にある。君は自分の意志で帰るのではなく、私が夫の元へと帰してやらねばならない存在なのだ。前回考えた「せつなさ」と淋しさの違いを思い出せば、「君かへる」は淋しさで、「君かへす」はせつなさ、ではないだろうか。

そのせつなさを心に持って読みすすめると、下の句も、単に美しくロマンチックなだけのものではないような気がしてくる。今の自分は、愛する人を包んでやることできない。だから代わりに雪よ、せめて彼女を、やさしく甘く包み込んでやっておくれ……。そんな、無力感の中の、ぎりぎりの愛の表現なのかもしれない。

背景にある現実、非常にどろどろしたものだが、それがこんなに透明な世界へと歌いあげられていることにまた、感動を覚えずにはいられない作品だ。現実を濾過(ろか)されて、ここには純粹な心のしずくだけがある。

きたはら・はくしゅう 1885-1942年。福岡県生まれ。
歌人、詩人、童謡作家。掲出歌は第一歌集『桐の花』所収。

きぬぎぬの朝：男女が夜を共にした翌朝。

この歌の背景にある事実とは何か。

「君かへる」ではなく「君かへす」ことの重みとは何か。

「前回考えた」については、「ポイント解説」を参照。

淋しさ・せつなさをそれぞれ感じたのは、どのような場合か。

「現実を濾過されて、ここには純粹な心のしずくだけがある」とはどういうことか。

背景(はいけい)① 人妻(ひとづま)② 姦通罪(かんつうざい)③ 無力感(むりょくかん)④ 透明(とうめい)⑤ 濾過(ろか)⑥ 純粹(じゅんすい)⑦ 福岡県(ふくおかけん)⑧ 童謡(どうよう)⑨ 桐(きり)⑩

新出単語

クロッカス(crocus)② <名>	アヤメ科の多年草。早春、黄・紫・白などの花をつける。
ふちどる③ <他Ⅰ>	縁をつくる。特に、物のへりや周りに色を塗ったり布切れをつけたりして細工を施す。
馴染む(なじむ)② <自Ⅰ>	環境などになれて違和感をもたなくなる。なれて親しむ。
ぱりぱり⑩ <副>	張りがあったり、こわばっていたりするさま。
糊づけ(糊付け・のりづけ)⑩ <名・自他Ⅲ>	洗濯した布の形を整えるためにのりをつけること。
ぎこちない④ <形Ⅰ>	しゃべり方や態度などがなめらかでない。
口ずさむ(くちずさむ)④ <他Ⅰ>	詩や歌などを思いつくままに口にしたり歌ったりする。
可愛らしい(かわいらしい)⑤ <形Ⅰ>	子供らしい無邪気さや見た目の好ましさで、人をほほえませるようなさま。
ギリシャ(ラテン語 Graecia)① <名>	ヨーロッパ南東部、バルカン半島南端部とエーゲ海のクレタ島・ロードス島・レスボス島などから成る共和国。西洋文明の源流をなす古代ギリシャ文明の発祥地。首都アテネ。
温もり(ぬくもり)⑩④ <名>	あたたかみ。ぬくみ。
芽吹く(めぶく)② <自Ⅰ>	木の芽が出はじめる。新芽が萌えはじめる。
掲出歌(けいしゅつか)④ <名>	ここで掲げた短歌。
伐り倒す(きりたおす)④⑤ <他Ⅰ>	立っている物を切って倒す。
初々しい(ういういしい)⑤ <形Ⅰ>	物慣れないで幼い感じがする。世間慣れしていないくて、若々しく新鮮にみえる。
俳句(はいく)⑩ <名>	五・七・五の3句17音を定型とする短詩。
歌人(かじん)⑩① <名>	和歌を詠む人。また、それを職業とする人。歌詠み。
種まき(たねまき)② <名・自Ⅲ>	種子をまくこと。
演出家(えんしゅつか)⑩ <名>	演劇・映画などの演出を職業とする人。演出者。
競馬(けいば)⑩ <名>	競走馬に一定の距離を走らせ順位を競う競技。また、その勝馬や着順などを当てる賭け。
死す(しす)① <自Ⅲ>	死ぬ。

くちづける(口付ける)④〈自Ⅰ〉	自分の唇を相手の唇・顔・手などに触れる。接吻する。
屈託(くったく)⑩〈名・自Ⅲ〉	ある一つのことばかりが気にかかって他のことが手につかないこと。くよくよすること。
口づけ(口付け・くちづけ)⑩〈名・自Ⅲ〉	接吻。キス。
しかめる(輦める)③〈他Ⅱ〉	痛みや不快のために、まゆのあたりにしわを寄せる。
思い描く(おもいえがく)⑤〈他Ⅰ〉	情景などを想像して頭の中に描く。
順々(じゅんじゅん)③〈副〉	順序を追ってすること。順次。
いっせいに(一斉に)⑩〈副〉	みんながそろって。同時に。
隅々(すみずみ)②①〈名〉	あちこちの隅。また、あらゆる方面。
つぼみ(蕾)⑩③〈名〉	花の、まだ咲き開かないもの。
上の句(かみのく)③〈名〉	短歌で、五・七・五・七・七の前半の五・七・五の3句。
下の句(しものく)③〈名〉	短歌で、五・七・五・七・七の後半の七・七の2句。
生真面目(きまじめ)②〈名・形Ⅱ〉	非常にまじめなこと。まじめすぎて融通がきかないこと。また、そのさま。
物静か(ものしずか)③〈形Ⅱ〉	言動が落ち着いて穏やかなさま。
ノリ(乗り)⑩〈名〉	調子づくこと。
ひょうきん(剽軽)③〈名・形Ⅱ〉	気軽でおどけた感じのすること。また、そのさま。
プレイボーイ(playboy)④〈名〉	多くの女性を次々に誘惑してもてあそぶ男。また、粹に遊びまわる男。
さりげない④〈形Ⅰ〉	何事もないように振る舞うさま。それらしいようすを感じさせない。なにげない。
効果的(こうかてき)⑩〈形Ⅱ〉	ききめが目に見えて現れるさま。
相聞歌(そうもんか)③〈名〉	「相聞」は万葉集の和歌の部立ての一つ。恋慕や親愛の情を述べた歌。
余裕(よゆう)⑩〈名〉	必要分以上に余りがあること。また、限度いっぱいまでには余りがあること。
共通項(きょうつうこう)③〈名〉	二つ以上のものに共通して存在する項目・要素。
醒める(さめる)②〈自Ⅱ〉	感情に動かされずに冷静である。冷静になる。
幼い(おさない)③〈形Ⅰ〉	年齢が低くて小さいさま。
敷石(しきいし)⑩〈名〉	通路・玄関先・庭などに、敷き並べた平らな石。
遠ざかる(とおざかる)④〈自Ⅰ〉	遠くに離れてゆく。遠のく。

ささやか② <形Ⅱ>	形や規模があまり大げさでなく、控えめなさま。
静けさ(しずけさ)③ <名>	(形容詞「静けし」の語幹に接尾語「さ」の付いた語)静かであること。
甘酸っぱい(あまずっぱい)⑤ <形Ⅰ>	楽しさと物悲しさとが入りまじった気持ちであるさま。
翌朝(よくあさ)⑩ <名>	翌日の朝。よくちょう。
きぬぎぬ(後朝)⑩② <名>	相会った男女が一夜をともにした翌朝。また、その朝の別れ。
ひっかかる④ <自Ⅰ>	すっきりと納得できないで、こだわる。
拘置所(こうちしょ)⑩ <名>	刑事施設の名称。被告人や死刑囚を収容する施設。
引き裂く(ひきさく)③ <他Ⅰ>	無理に離す。
せつない③ <形Ⅰ>	悲しさや恋しさで、胸がしめつけられるようである。やりきれない。
ぎりぎり⑩ <名・副・形Ⅱ>	限度いっぱい、それ以上余地がないこと。また、そのさま。
どろどろ①⑩ <副・形Ⅱ>	欲望や感情などがもつれ合って、奥底にわだかまっているさま。
濾過(ろか)① <名・他Ⅲ>	混じり物を除く。水などを清浄にする。また、そのこと。
しずく③ <名>	したたり落ちる液体の粒。
所収(しよしゅう)⑩ <名>	おさめられていること。ある論文や作品が書物・全集などにおさめられていること。

ポイント解説

1. 現代短歌と俵万智

本課で五・七・五・七・七の短歌を数首読んでみた。短歌は古くから詠まれている短詩の一種であるが、本課で取り上げたのはいずれも現代短歌である。いわゆる現代短歌は近代短歌が終焉した1953年以降の短歌をさすといわれるが、口語短歌運動としては、ライトヴァースやニューウェイブなどがあった。

俵万智の第一歌集『サラダ記念日』が出版されたのは1987年。詩歌集は売れないといった常識をくつがえし、280万部の大ベストセラーになった。彼女はライトヴァースの旗手として口語短歌の裾野を一気に広げ、話し言葉を多用するなど短歌のイメージを変え、現代短歌の先駆けになったとも言われている。今では歌のいくつかが国語の教科書にも載っている。

○「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日